

研究分野	資源生態	機関・部	水産総合研究所・漁場環境部
研究事業名	スルメイカ漁場形成早期予測手法開発調査		
予算区分	研究費交付金(産技センター)		
研究実施期間	H19～H21		
担当者	大水 理晴		
協力・分担関係	日本海区水産研究所・北海道区水産研究所		

〈目的〉

本県いか釣漁業者の効率的な操業を可能にするため、日本海における早期のスルメイカ魚群分布と密度、海洋環境を把握し、スルメイカ漁況予測情報を提供する。

〈試験研究方法〉

図1に示した操業・観測地点において、平成21年5月14日～25日に試験船開運丸(208トン)で1地点3～9時間のイカ釣り操業とCTDを使用して水深400m以浅の水温・塩分観測を実施した。

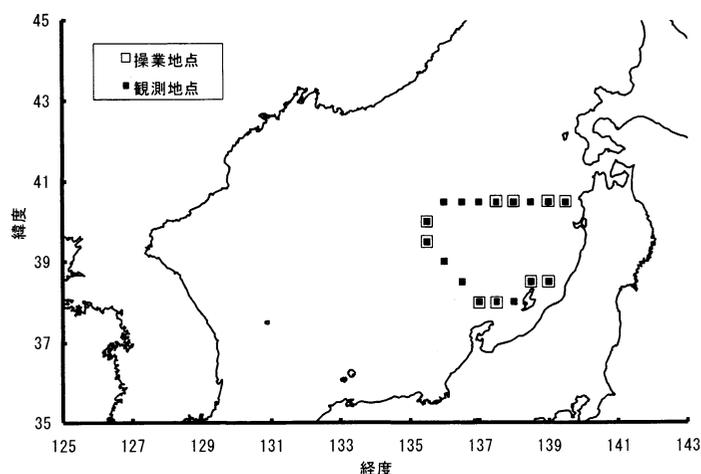


図1 操業・観測地点

〈結果の概要・要約〉

各操業地点でのスルメイカ漁獲尾数は0～780尾、全操業地点での平均漁獲尾数は251尾であり、CPUEは0～16.9(尾/台/時間)であった(図2、図3)。また、漁獲されたスルメイカの外套背長の組成は10～19cmであり、モードは14cmであった(図4)。

スルメイカの分布が多く見られた海域は、大和堆周辺海域で漁獲尾数は731尾、CPUEは16.9(尾/台/時間)、佐渡ヶ島～能登半島付近の海域で漁獲尾数は266～678尾、CPUEは3.6～6.5(尾/台/時間)、本県沖合で漁獲尾数は780尾、CPUEは4.9(尾/台/時間)であった。昨年5月に実施した調査結果と比較すると今年の佐渡ヶ島～能登半島付近での平均CPUEは3.2(尾/台/時間)と前年の平均CPUE2.7(尾/台/時間)を上回った。このことから、今年の本県沿岸に来遊するスルメイカが前年より多くなる可能性が示唆された。実際、平成21年6月の本県日本海4漁協(小泊・下前・鱒ヶ沢・深浦)での一本釣によるスルメイカ漁獲量は275.5トンと同期の前年比は179%であった。

また、調査地点での表層の水温帯は9～15℃台であり、スルメイカが漁獲された操業点の表層の水温帯は10℃以上であった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

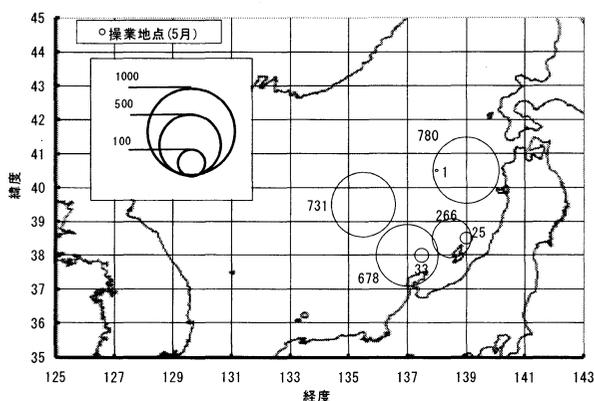


図2 操業地点でのスルメイカ漁獲量

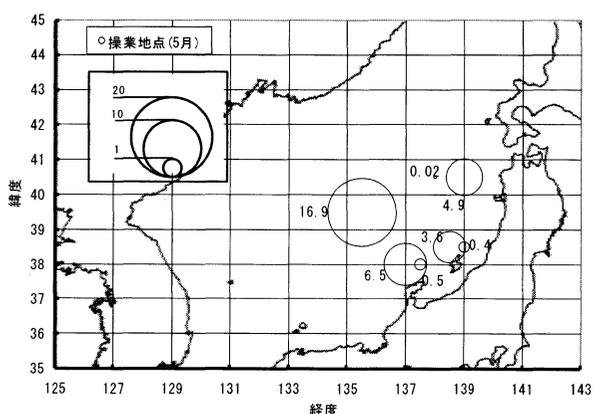


図3 操業地点でのスルメイカのCPUE(尾/台/時間)

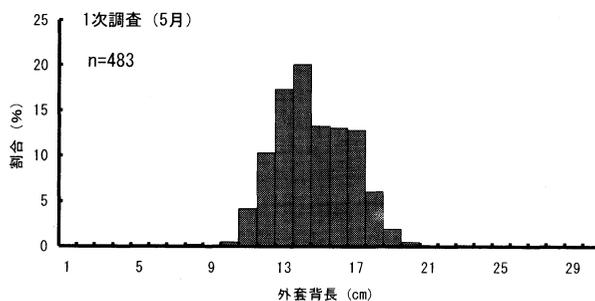


図4 操業地点で漁獲されたスルメイカ外套背長組成

〈今後の問題点〉

- ・スルメイカの漁場形成・回遊状況と海洋構造との関連性を見出す。

〈次年度の具体的計画〉

- ・今年度で終了。

〈結果の発表・活用状況等〉

- ・本県の調査結果や他県の調査結果等を「今季のスルメイカ漁況」に係る情報として整理し、4月に八戸・大畑の中型いか釣船漁業者、5月に東通村の小型いか釣船の漁業者へ提供した。
- ・調査・操業結果について、随時、八戸漁業用無線局を通じて中型いか釣船へ情報提供すると共にウオダス(漁海況情報)で公開した。